

ブナ帯文化のふるさと 水の郷in北秋田

あきた森づくり活動サポートセンター
ふるさと水と土指導員 菅原 徳蔵



- ブナの森…主に東北から北海道西部に分布
- ブナ帯地域の暮らしと文化→ブナ帯文化
 - ① 北秋田市の木と鳥…ブナとクマゲラ
 - ② ブナ帯文化の代表がマタギ文化
 - ③ マタギと言えば北秋田市
 - ブナ帯文化のふるさと
- 北秋田市森吉地域「水の郷百選」(国交省)
 - 水の郷IN北秋田

ノロ川のブナ林「クマゲラの森」

平賀源内肖像

- 1773年6月～10月末、鉱山再開発のエンサルトとして秋田藩へ

- ① 銅から銀を採出す「南蛮吹法」を伝授
- ② 小田野直武に西洋画法伝授→秋田蘭画
- ③ 熱気球の原理を応用した遊び「紙風船」(仙北市上桧木内)

乙巳仲夏 熟老漢隱居故老之説撰寫



平賀源内

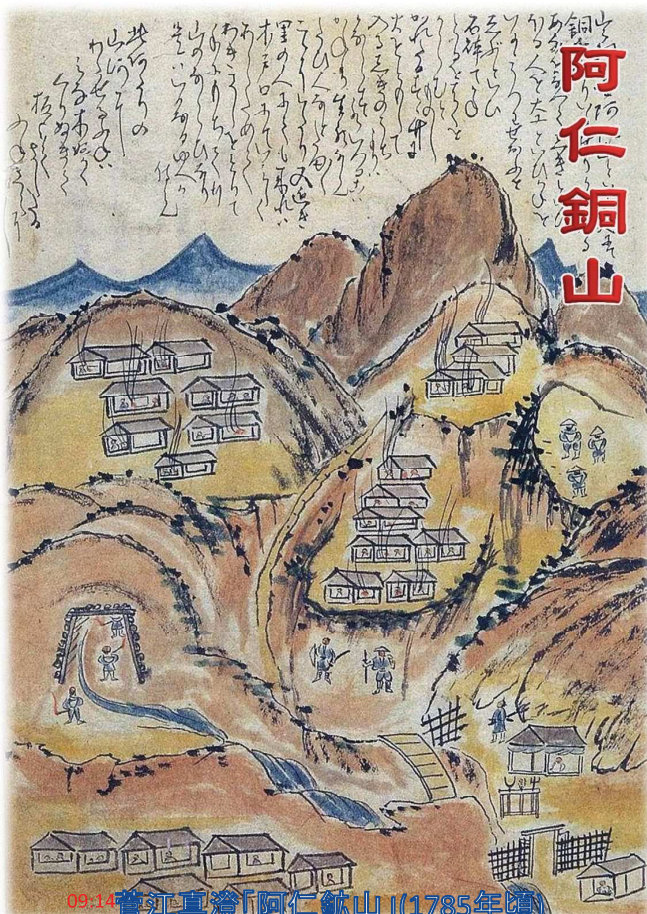
巨人・余所者

秋田に最も影響を与えた

- 1785年～1805年、森吉山麓周辺に3回も訪問
- 森吉山には2回も登山
- 紀行文を読みまづ、当地域の自然、暮らしと文化を愛した



菅江真澄



09:14 菅江真澄「阿仁銅山」(1785年頃)

- 18世紀初め…年間の出銅量はコメに換算すると約70万石、日本一の銅山
- 阿仁の粗銅には多くの銀が含まれていますが、それを取り出す精錬技術は幕府の門外不出の技術。
- 阿仁銅山の粗銅は北前船で大阪まで運ばれ、幕府指定の吹屋で再び製錬され、銀を絞り出し後、幕府貿易の決済に。
- 幕府の買値は相場よりも安く、美味しい汁は幕府と大阪の商人、吹屋で吸い上げられていた。



阿仁銅山・黄銅鉱



焼窯に薪を積み、ハクを水にて混ぜ合わせ燃やして

- 絵図を見れば、製錬には大量の薪と炭を要したことが分かる。
- 銅山用の山留材、薪炭を伐り出す藩直営の山を設定…阿仁と森吉にとどまらず、桧木内、小阿仁川流域、小猿部川流域まで拡大。



- 藩の鉱山経営は赤字に転落。
- 1773年、平賀源内と鉱山師・吉田利兵衛を秋田に招いた。
- 阿仁の粗銅から、鉛を使って銀を採り出す「南蛮吹法」を伝授。
- 翌年、二ツ井町荷上場に加護山精錬所誕生



ニツ井町荷上場、加護山精錬所跡(きみまち阪裏手)

南蛮吹法(国立国会図書館)

- 1862年の収支…2万8800両と、莫大な利益



菅江真澄「みかべのよろひ」



人面土器「みかべのよろひ」(阿仁戸島内)

- 1805年7月3日~8月15日の紀行文
- プナ帯文化の基層となる縄文文化、アイヌ語地名、マタギ文化を発見する旅。



① 七日市羽立

「みかべのよろひ」1805年8月7日、上舟木から羽立に向かう途中
 「大岩をうがって溝をつくり、田に水を引いている…七日市の村長長崎某が二百五十
 余の人を使って、段の沢田というところから、高さ1丈八尺、周囲二十尋以上の大きな石
 をひきおとし、山川をせきとめて田に水を引くようにした。後の世にどれほど貢献したか計り
 知れない。」…長岐家七代目・長崎七左衛門の偉業を讃えている。

羽立地内の元堰(岩堰)

- 1731年、坊沢村肝煎長崎家4男
- のち七日市村新郷肝煎長岐家養子に
- 25歳の若さで長岐家七代目を継ぐ
- 1820年10月1日、90歳で逝去。長生きなお陰で「老農置土産」「置ミヤガ添日記」「農業心得記」など多数の著作を残し、明治以降の老農たちへ継承。



長岐家七代目
 長崎七左衛門



- 1753年8月20日ミルカ降り凶作、翌年水不足と虫の害で凶作
- 翌々年5月24日洪水に岩根、用水路の全てを破壊+虫の害で大凶作
- 七日市村の1/3はつられ、240石余が荒地、耕作放棄
- 3年連続の大凶作に見舞われ、1755年、七左衛門が肝煎就任

岩堰

「タガネとノミ」だけで、岩壁に堰を造るってすごいねっ！の巻

偉大な功績 治水・利水工事

藩政時代の初期頃から新田開発が積極的に行われるようになります。原野を開拓し、田畑の耕地を広げればそれだけ石高が増え、農民の自給自足も安定し、貢租が確保されることになります。しかし新田を開発するためには、安定的な灌漑用水の確保が課題となりました。

小猿部川は、ほとんどが切り立った峡谷のような形であることから、用水の確保は大変な難関なことだったでしょう。小猿部川の治水工事は10数か所にも及び、それらは全て親類肝煎である長純家が付の発展のために、私財を投じて行なった事業でした。岩根などの工事が取組まれていたことは、近隣の鉱山などで従事するものの援借技術に負うところの側面も忘れられません。度重なる洪水による堰根の決壊などと闘い続け造り上げたこれらの堰は、その後の繁栄の基礎となり、一部は現在でも立派に利用されています。



岩を落とし堰根にした「留の大岩」
切り落としの図（イメージ）



元堰

五代目甚之丞が築いた堰。別名『岩堰』とも呼ばれている。江戸時代にタガネとノミでこつこつ岩を削り水路を通した。開削作業には鉱山の堀夫や鍛冶屋を雇い、作業小屋をつかって常駐させ3年間を要して完成した。堰根留はこの地点より700m近い上流の羽立に設けた。

中堰

七代目七左衛門が築いた堰。岩の中にトンネルを通して。その後、九代目文蔵が補強。



三段留

九代目文蔵が中堰の補強の為に築いた堰根留。上流から大きな石を大勢で引っばってきて留にしたことから『千人引きの大石』という名前が残る。川の流れを抑える為に三段にし、三段目は川幅が一番狭い場所に、丸太を渡し石を積んで留にした。



大洪水により堰根留は崩れ、大岩も下流へ流されてしまっただけで、今でも見られます。



大留堰堤

七代目七左衛門が築いた堰堤。谷の真ただ中に、石を積み周囲を丸太で囲ったもの。現代のロックフィルダム。

洪水の際の水吐き

大木を横たえ余剰水を落とす

洪水の際の水吐き

• 最初に手掛けたのは、水の確保

木の樋・掛樋→洪水が起きる度に破壊され、農民たちの苦の種

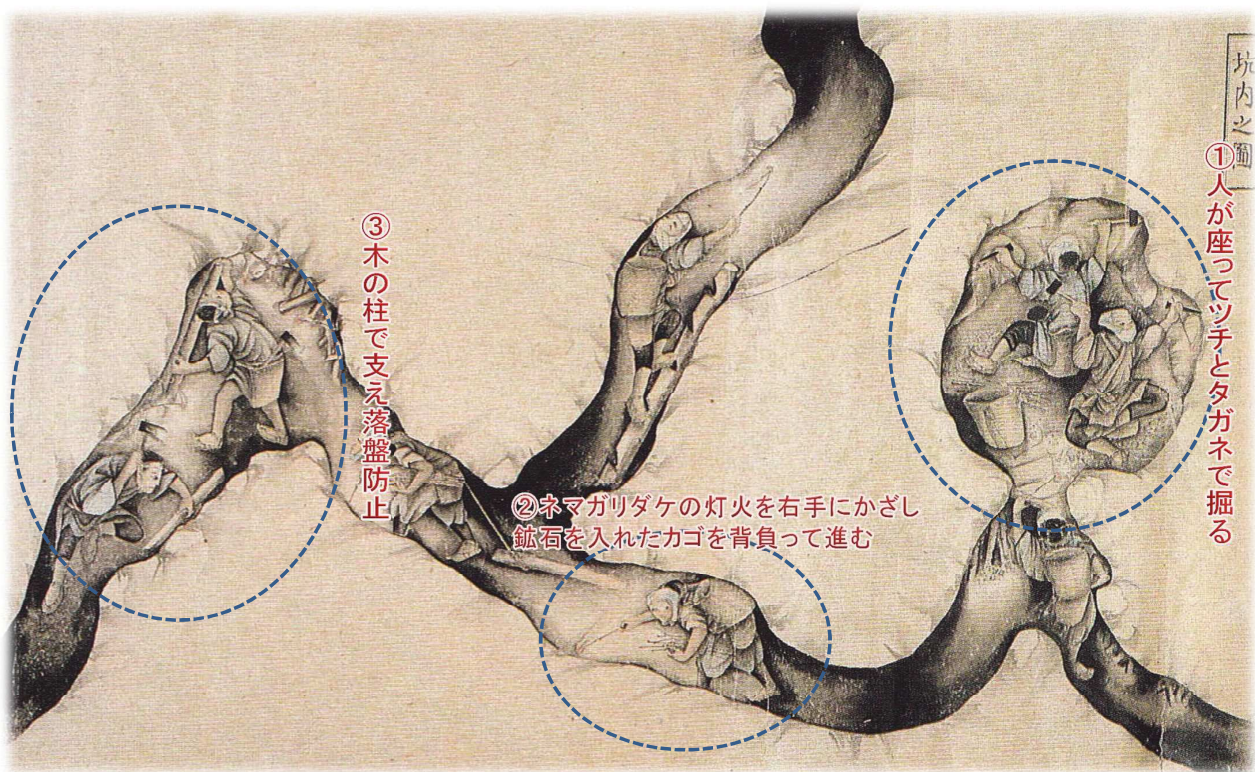
• 鉱山技術を活用→断崖絶壁に水路トンネル(中堰)、木製掛樋→大留堰堤等を完成



1712～1714年、長岐家五代目が開削



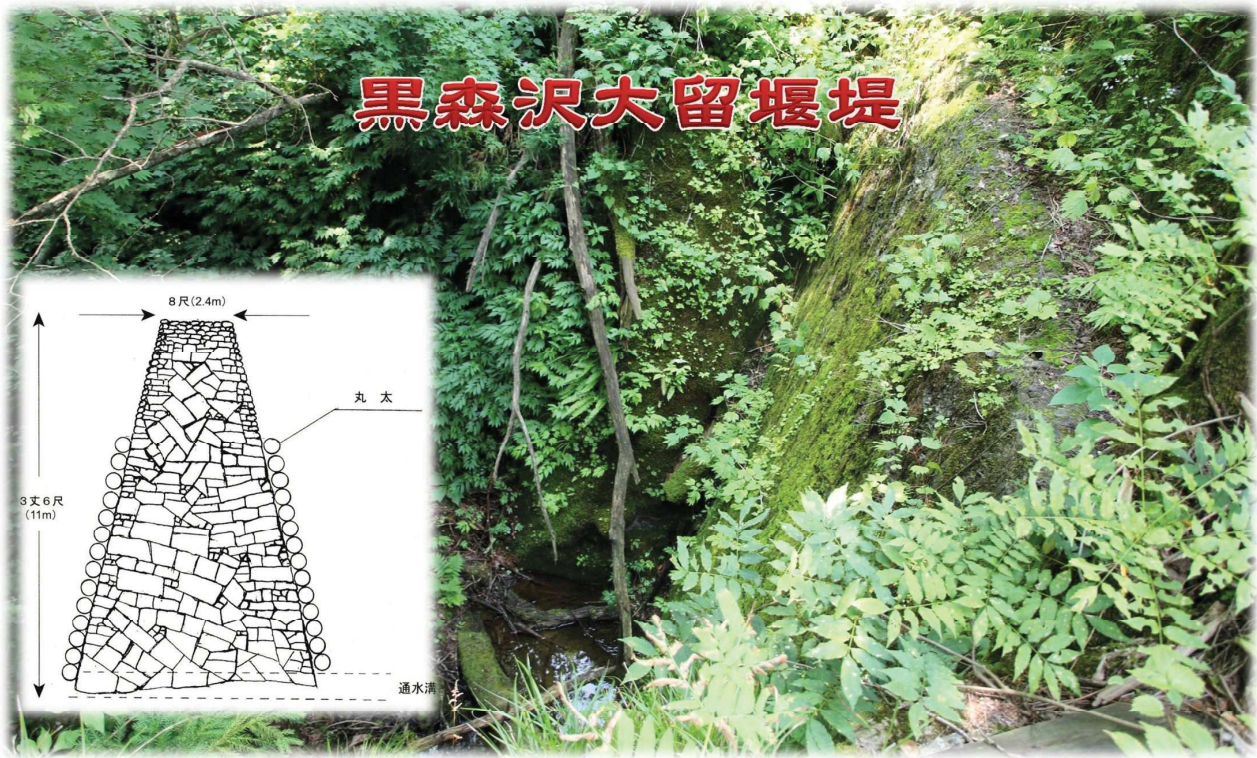
- 断崖絶壁に水路を切り開く難工事。
- どんな方法で堅い岩盤を掘り進めたのか？



尾去沢鉱山絵図「坑内の図」…坑道は幅60cm、高さ90cmで、人が作業をする最小限の坑道であったことが分かる。(秋大鉱業博物館蔵)→当時最先端の鉱山技術に応用



- 堅い岩盤を掘り抜く工法「焼堀」…火を焚いて岩を熱した後、水をかけて急激に冷やすことで岩をもろにする。石が冷えるのを待って堀子がツチとタガネで掘り進んだ。



- ・ 沢を横断する木製掛樋→石を積み上げサロソクフィルダムに改修
- ・ 七代七左衛門が1773～4年かけて完成
- ・ 使用した石工(いし)3,500人



- ・ 七左衛門「大事代記」…桜ヶ台の堰筋にある樋が洪水の度に押し流された。
- ・ 1766年～1769年、堅い岩盤の峡谷に水路シネル「岩穴堰」をつくる。
- ・ 阿仁鉱山の技術がなければできない難工事。
- ・ 当時の水利事業としては最先端の技術で実施されたことが分かる。



関根林

- ・ 羽立地内の堰下流左岸の山は「関根林」と呼ばれていた。
- ・ 近くの「石転丸」の岩場から大石を運び、杭と柴と玉石で堰堤を築く。
- ・ 恐らく毎年のように雪代や洪水で破壊され、その度に修復したであろう「関根林」「石転丸」の地名から暴れ川に苦闘した歴史がしのばれる。



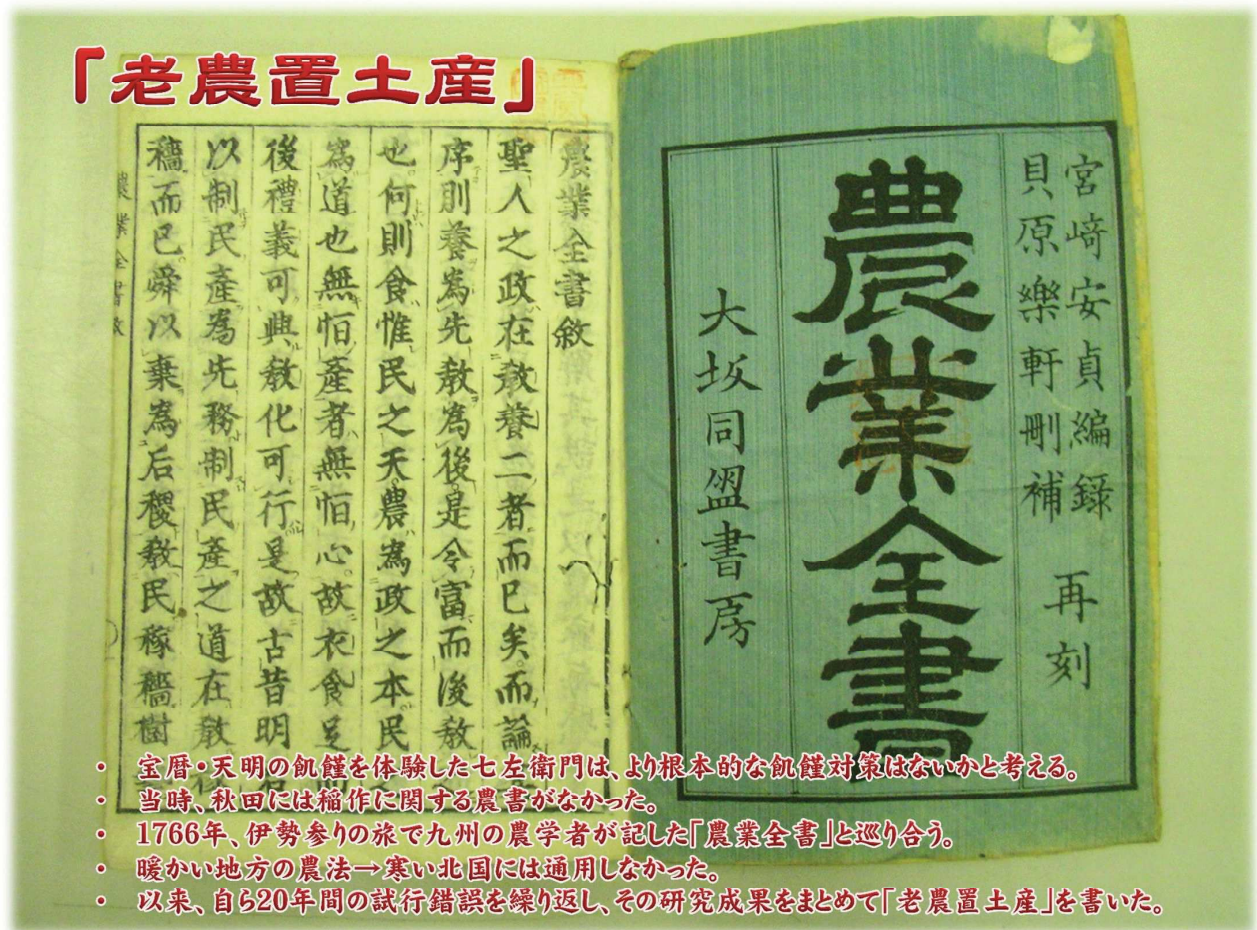
「置みやげ添日記」…天明の飢饉

「天明三年は前代未聞の大不作で、元禄八年の飢饉より宝暦五年のそれよりひどかった。この年は正月から東風(ダシ)が吹き、凶作となったのである。当村では、門ヶ沢・松沢・明利又とも収穫皆無で、村の減収率は6割であった。

…隣国も不作で、津軽からの流民が多く、九月二十三日には小繋村の渡し場を通った流民が四百八人もいたという。…

幼児は捨てられ、父母を探し迷う姿は、まるで地獄である。路上での追いはぎ・強盗の様は修羅道と言え。かわいそうにと幼児の手に食物を握らせると、その親が奪い取って自分で食べてしまう。全く親子兄弟の情もなく、畜生道という有り様だ。…目の前でこうした悲惨な姿を見ていると、言うべき言葉を知らない」

「老農置土産」



- ・宝暦・天明の飢饉を体験した七左衛門は、より根本的な飢饉対策はないかと考える。
- ・当時、秋田には稲作に関する農書がなかった。
- ・1766年、伊勢参りの旅で九州の農学者が記した「農業全書」と巡り合う。
- ・暖かい地方の農法→寒い北国には通用しなかった。
- ・以来、自ら20年間の試行錯誤を繰り返し、その研究成果をまとめて「老農置土産」を書いた。



- ① 良い種を選ぶ方法として、良く熟した優秀な穂を抜き取る
- ② 水ご種子を入れ、沈んだ実入りの良いものを種田にする「水選」の実施を鑑問。
- ③ 苗代は苗をとった後、緑肥を入れて土地を肥やしてお苗代専用の「通し苗代」をすすめるなど、北国の風土にあつた農業技術の普及に心血を注ぐ。
- ④ かんがい用水の確保のための川留め、関根留めを記述。
- ⑤ 山林経営を農村の維持発展の一条件…森林と水の重要性を鑑問。



- ・「天保凶飢見聞記」…鷹巣地方の見聞。倒れた馬にからついて生肉を食い、行き倒れとなつた死体をオオカミやカラスが食いしきる。
- ・天保3(1832)年、4年、5年、6年、7年と5年連続の凶作。
- ・中でも4年が大凶作で、巳年→「巳年のかち」と呼ばれた。
- ・秋田藩の人口40万人のうち死者が10万人出たとの説もある。

- ・「秋田県史」(二巻)…藩政期約260年間に凶作は71回、4年に一度発生
- ・明治の東北地方…24回もの凶作。特に明治35年と38年は大凶作。身売りや欠席児童が多く、学校教育が不可能に。
- ・特に積雪寒冷地帯・北東北三県は、昔から凶作飢饉常習地帯→ブナ帯文化(稲作+ブナ帯の森の恵み、川の恵み)
- ・貧農救済に生涯を捧げた人物、老農石川理紀之助が誕生



晩年の石川理紀之助(66歳、明治43年)

青年時代の石川理紀之助



「羽立といふ村と明利又村との間の細道のかきおろし、田畑の片から掘り出したといふ浅利一族の墓碑群、というのが十三も並んで立っている。みな文字が消えてしまつて…嘉吉(かきつ)某年(1441～1444年)とどうやら読み解くことができた。」

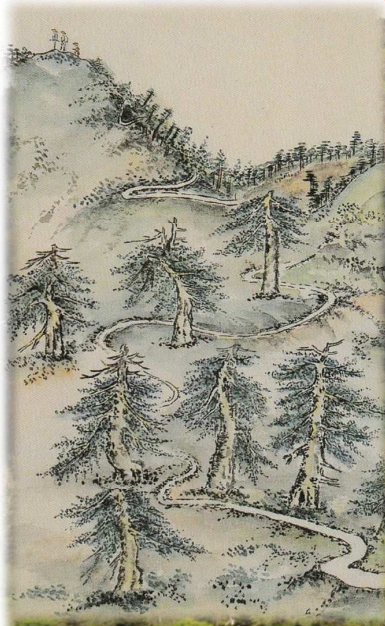
This map illustrates the Ōu Campaign and the Shōri clan. The map shows the coastline of Honshū, Japan, with the Sea of Japan to the west and the Inland Sea to the east. The main landmass is divided into three regions: 陸 (Land) to the east, 出 (Sea) to the west, and 奥 (Inland) to the south. The map highlights the following locations and events:

- ① 源頼朝の奥州征伐** (Genrai-chō's Ōu Campaign): 1189年8月22日、平泉陥落 (August 22, 1189, Hei-on captured). 甲斐源氏の一族・浅利氏同行 (The clan of the Kai Genji, the Asakari clan accompanied). The map shows the route from Hei-on (平泉) to the Sea of Japan, passing through the Inland Sea (出) and the Land (陸).
- ② 藤原泰衡逃亡 北海道へ向かう** (Fujiwara no Taikei escapes towards Hokkaido). The map shows the route from Hei-on (平泉) to the Sea of Japan, passing through the Inland Sea (出) and the Land (陸).
- ③ 大館の領主・河田 贄柵次郎に裏切られ死亡** (The lord of Ōdaira, Kawai no Tadatsune, is betrayed and dies). 9月3日、泰衡死亡 (September 3, Taikei dies). The map shows the route from Hei-on (平泉) to the Sea of Japan, passing through the Inland Sea (出) and the Land (陸).

Other locations marked on the map include 秋田城 (Akita Castle), 由利維平 (Yuruikei), and 河田次郎 (Kawai no Tadatsune). The map also shows the route of the Ōu Campaign and the Shōri clan, passing through the Inland Sea (出) and the Land (陸).

-
- 藤原泰衡の墓
 犀川
 大館市仁井田
- 仁井田の人たちによつて埋葬・供養

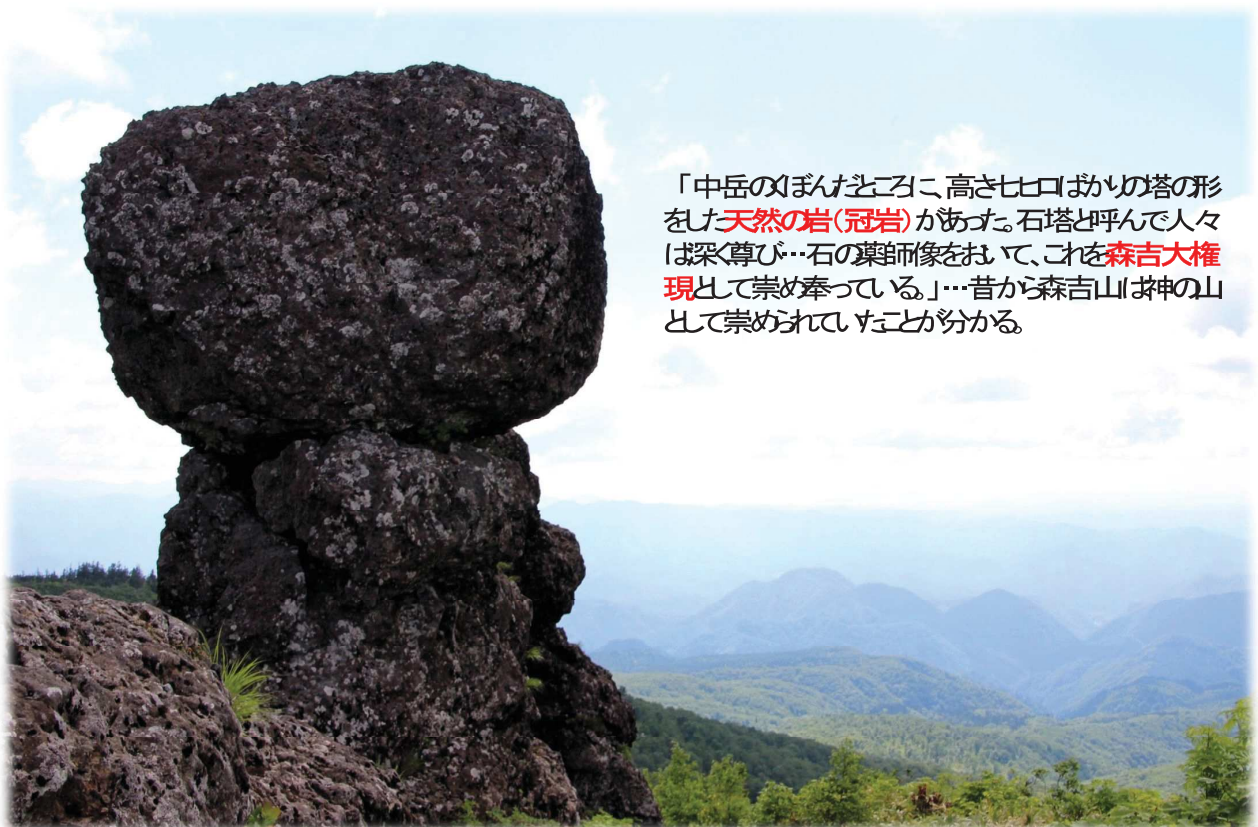
③ 森吉山登山



「モロビの絵図」(県立博物館蔵)



モロビのきめ火の風習…「森吉山は一面モロビアオモドマツが生えている。登った人は必ずこれをみやがに折って下り一年中、朝夕、きめ火に用いる。」



「中岳の山頂に高さ七ヒロばかりの塔の形をした天然の岩(冠岩)があった。石塔と呼んで人々は深く尊び…石の薬師像をおいて、これを森吉大権現として崇め奉っている。」…昔から森吉山は神の山として崇められていたことが分かる。



「神の花畑といふところがあって、七草をまめ、ゼンテイカ、オオノキボク、あればこれやの花が一面咲いている。」→現在、花の百名山



トチノギ沢、木こり半三郎宿…「柄が4尺余りの鎌で、ホロといふもので竹火をともし、屋の隅まで明る照らして、ものを食べ、安らかに寝ることができた。」

坑内にネマガリダケの竹火を持って働く鉱夫を掘子と呼ぶのだから、竹火をさす器をホリコと呼んでいる。





- ・ 縄文土器を描いたのは真澄が初めて…考古学の世界では高く評価。→200年後、北海道・北東北縄文遺跡群世界文化遺産暫定リスト登録
- ・ 阿仁にアイヌ語地名が多いことを発見。→100年後、金田一京助が北東北のアイヌ語地名に関心を抱き、1932年、奥羽の地名から見た本州蝦夷語の研究を発表

「みかべのぼり」1805年8月11日

「戸鳥内の村にきき、この辺り共と蝦夷が住んでいたのであらう。山がガオカンナイ笑内）とところがある、それと知られる。アスヒエ、キビをやる山畑を開墾して、とき人の面のぼり土器を掘り出したことがあると、うとこに、それを見ると、陸奥の車登（三内丸山遺跡）の細から掘り出されたものと同じであつた。」



⑥ 根子

- ・ マタギ言葉にアイヌ語が多いことも発見
- ・ 北緯40度以北…稲作単一文化圏とは異なるブナ帯民俗を発見
→「歩く、見る、聞く、記録する」ことに一生を捧げた？

1805年8月15日…「山ひとつ越えと根子といふ部落があつた。この村はみな、マタギといふ冬狩をする単人の家が軒を連ねてゐる。このマタギの頭の家には古くから伝えられる巻物を秘蔵してゐる…かれらのつから山言葉の中からは獲物の肉をサチノミ、米を草の実といふ、その中からは蝦夷言葉が、いそ多かつた。」—現在、阿仁はマタギ発祥の地、マタギの里、全国マタギの本家



阿仁銅山働方之図 (秋田大学 鉱山絵図・絵巻デジタルギャラリー)

藩の鉱山経営が赤字になると、炭焼きのコスト削減。天保10年(1839)10月、阿仁の請負人7人は連名で炭焼きの請負値段引き上げを願い出た。「**従来の値段では安くて妻子も養えないから他国へマタギ商売に赴き、それをする者が後を絶たない**。その旅マタギに出る者は特に打当村と中村の山子に多かった。」と記されている。



写真:秋山郷総合センター「秋山マタギの狩猟文化」

同じ1800年代、阿仁町打当の旅マタギ・忠太郎とその息子・松之助が長野県秋山郷大赤沢の婿として定着。その松之助の三代目に当たる秋田マタギの子孫がクマ獲り文五郎。新潟・長野両秋山郷に彼らの子孫が婚姻等によって広がり、明治から大正にかけて狩りの組織がつくられていった。

→秋山郷の獵師は、「阿仁マタギは本家」



第1回は1990年3月、新潟県三面集落の公民館で開催
新潟県三面集落、長野県秋山郷、秋田県阿仁町 36名参加

2013年3月12日



JOMON ART フェスタ

2014年10月国民文化祭



- ・ 大湯環状列石…鹿角市大湯地区は元マタギ集落。
- ・ 大湯地区は、三湖伝説の主人公・八郎太郎出生の地、八郎太郎はマタギ。
- ・ 伊勢堂岱遺跡…マタギの本家・北秋田市→マタギは縄文の末裔

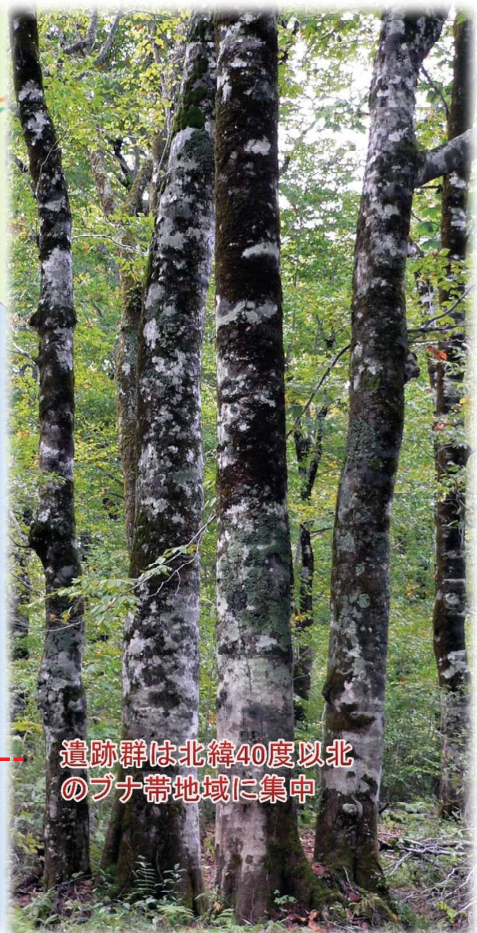
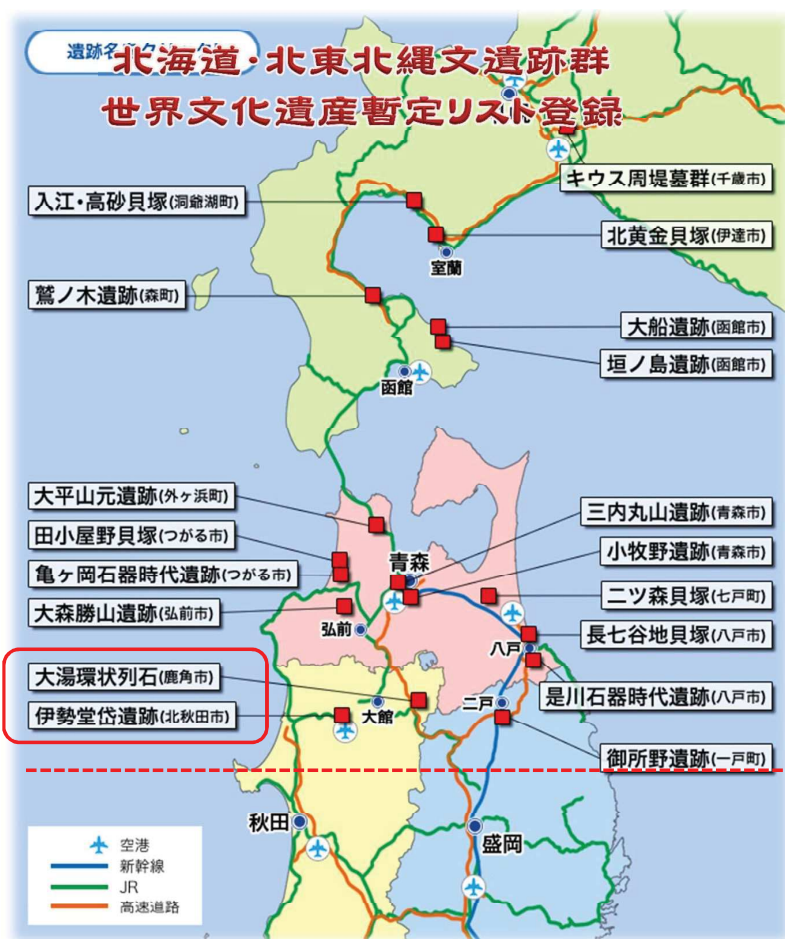
国指定史跡

伊勢堂岱遺跡

遺跡が発見された台地は、白神の山々の眺望の良さが際立っている。その
景観から、「母なる森・ブナ」が生み出した文化であることが分かる。



北海道・北東北縄文遺跡群 世界文化遺産暫定リスト登録



遺跡群は北緯40度以北
のブナ帯地域に集中



「縄文の思考」(小林達雄)・・・山は、縄文人によって発見された精霊の宿る特別な山であった。民間信仰に見られる田の神は、春に山から降りてきて、田の神になり、秋になると山に帰って山の神になると信じられている。これは、縄文時代以来の山の神が、弥生時代以降農耕とともに田の神に分派したとみるべきである。一日本文化の基層は縄文文化

「ブナ帯文化のふるさと」を象徴する風景

山の神が宿る森吉山(1,454m)と戸島内棚田
(「守りたい秋田の里地里山50」/県農山村振興課)



危険なクマを寄せ付けないために
緩衝地域の創出

里地里山の保全 衰退する農林業の活性化

ご清聴ありがとうございました